

多様性の象徴 国会浮遊

安保国会では多くの議員が議論を交わす。与野党の「一人」に焦点をあて、審議から見えるものを考える。

7月15日の衆院特別委での安保関連法案の審議。採決しようとする委員長を取り囲む民主党議員のなかに辻元清美(55)がいた。胸にはピースマークのネックレスが光る。「委員長、やめて! 自民党が壊れますよ!」

衆院の審議では約1カ月半で10回質問に立ち、法案を「憲法違反」と追及した。陰で支えていたのが山崎拓(78)ら自民党の元重鎮。法案の問題点などを助言した。彼らは、辻元を政治に誘った土井たか子と並ぶ育ての親だ。

フレンドの妙

辻元は1996年、36歳で市民活動から民主党衆院議員に転じた。日本政治の多様性を象徴する存在かもしれない。当時は自民、社民、さきがけの連立政権だったことも、辻元の存在が生まれた。

社民党は小所帯。1年生の辻元も連立政権の政策協議に加わった。自民党の幹事長、政調会長だった加藤紘一

安保国会の政治家たち 民主・辻元清美氏

(76)、山崎らとNPO法や情報公開法など「自社さ」ならではの果実を喫らせた。辻元と会食を共にした宮沢喜一は外交の要諦を説いた。「勇ましいことは誰でも言える。相手の顔を立て、解決の糸口を見つめるのが政治だ」

保守とリベラル。当時の政権には油と酢のドレッシングのようなフレンドの妙があった。だが「真の保守」を目指し自民党政権に批判的な安倍晋三(60)と辻元とは接点が無かった。

この国会で、安倍は辻元に「早く質問しろよ」とヤジを飛ばした。かつては、持ち時

首相からヤジ

首相からヤジ



衆院特別委で、辻元清美氏に早く質問するよう、ヤジを飛ばす安倍晋三首相



間の少ない少数会派の質問に、「オーバーしてもいいよ」と異論を懐深く受け止める自民党ベテランがいた。国会は様変わりした。

山崎らOBは安倍を厳しく批判する。けれど現職の自民党議員は口をつぐんでいるようにみえる。宮沢や加藤の流れをくむ宏池会の関係経験者は、辻元とテレビで同席した時、安倍の主張を繰り返した。CMになると言った。「こう言わざるを得ないんですよ」

及び腰の民主

民主党は「多様性」を掲げている。だが、辻元の使い方には及び腰な面もある。

辻元は2003年、秘書給与問題で逮捕。再び永田町に戻り、10年には民主党政権を離脱した民主党に別れを告げた。11年に民主党に移ったが

「私は転校生。抑え気味にしないと」が口癖になった。再び奮い立ったのは昨年9月、憲法9条に人生を捧げた土井の他界だった。同じ頃、旧友の演出家、鴻上尚史(57)も背中を押した。「一度落ちる所まで落ちたんだから、やるだけやった方がいい」

地元の立ち飲み屋では自衛官の婚約者から「法案を止めて下さい」。街頭では、女性の非正規雇用について国会質問した辻元に冷ややかな世襲議員の関係をテレビで見た女性が「自分が笑われている気がした」と寄ってきた。「庶民の権力をつくらなアカン。自分の役割を再認識した。師走の衆院選で「国会の最後の歯止め」と集団的自衛権反対を前面に掲げる。安倍と維新の党の橋下徹(46)が挟み撃ちする大阪の民主党で唯一、小選挙区で勝った。

それなのに「まるで社民党の女性に乗っ取られたみたい」と民主党内の嫉妬は増す。維新との合流派からは「辻元は首長に回せばいい」「(中堅)との言まで飛び出す。私の祖父は太平洋の島で戦死した。戦争に行かせた側と行かされた側の孫が立法院で共に議論できるのは戦後民主主義のおかげ」。辻元は特別委で安倍に語りかけた。野党席からの拍手もばらばらと弱く、乾いていた。|| 敬称略

(南彰)



7月15日の衆院特別委で、安保関連法案の採決を前に質問する民主党の辻元清美氏